

『砌花発句』について

奥田久輝

I

『砌花発句』は宮内庁書陵部に一本(卷子本古写一本)が存している⁽¹⁾。宗砌の作とみられる春の発句一〇八句を配列し、その大半が花の句であるところから、巻首の名称もこれに一致するようである。しかし端作に更に春部とあるので、四季完備の大発句集として意図したもの的一部とも見做される。その場合は「花」をどう解釈するかである。他の季節の花は限られた少数に過ぎない。そこで「花能万賀喜」の文字と同義か、あるいは「詞は花の中に花を尋ね」(連理秘抄)と云った言葉かかりの精華、句の最上の優美さを指すと解することもできる。能における花がこれに近い。尤も春を象徴する意味で概括的に宗砌の花の発句と考えてもよい。潜在的に花の下連歌の名残りを承継しているのかも知れないのである。『菟玖波集』の発句部では四一多強と圧倒的に春の句が多いのが注目される(『新撰菟玖波集』は三六%)。北野万句とか正月十八日二月廿五日などの式日の発句の参考資料と云うこともあ

『砌花発句』について

ろう。しかしここで何より重要なのは、仮令それが春部だけであっても、他の多くの宗砌の句集に伍して、発句ばかり集め一卷としてまとめたことではなからうか。それまでこれに類した作品集が無かったと云うことである。その理由としては、

1 制作鑑賞ともに発句重視の気運が高まりつつあったこと。

2 宗砌の一座した発句が多数にのぼり⁽²⁾、その作風が世の好士たち⁽³⁾に持て囃されたこと。

3 將軍家に奉仕する宗匠として、連歌界の頂点に位置し、ひろく公武庶にわたって權威があったこと。

などを指摘し得る。本稿ではその結果成立したと思われる『砌花発句』について、個々の句を中心に検討を加えてみたい。

II

『菟玖波集』で発句部を設けたことは文芸としての発句観を示した第一歩であった。発句の①重要性、②有よう、③作法等について『筑波問答』は次のように述べる。

①当道の至極の大事たゞ発句にて侍るなり。発句わろければ一座みながれる。されば堪能宿老にゆづりて末座に斟酌あるべき也。

②先づ発句のよきと申すは深き心のこもり詞やさしく気高く新しく当座の儀にかなひたるを上品とは申すなり。一も欠けたらんはうるはしき秀逸にてはあるべからず。

③いかならん堪能も当座の百韻などにはたゞあさあさと同類なき様にするが一の体にてあるにや(中略)ことさら発句はその詮のあるやうに一ふしを案じ入れてする事なり。

深く心をまわし優雅な詞でもって長高く、また本歌本説を取つても、同時に新鮮な景物を随所に配置する要がある。その上意外性のある俳味で一座に興を添えなければならぬ。かかる必要条件が一つでも不足すると秀逸とは云い難いのである。このことは発句自体鑑賞の対象として重要視され出したことを意味する。『看聞御記』応永廿七年七月八日条に

御連歌院御発句 松ならぬ棍にもそふか手向草 又聞。石橋七夕発句。さほ鹿の星の逢夜やとし妻 連歌師共殊勝之由褒美云々。又四条聖発句。棍の葉にまた七種の花もかな 是も殊勝云々。猶石橋発句珍敷面白敷。

とあるのも右の事実を示す。発句は付句を予想しながら、巻頭として付句からの独立性を保持し、当座の百韻においては発想の場を反映させて、祝賀的挨拶的に表現することが要求された。『満濟准后日記』永享二年三月十七日条に「今日將軍為花御覧御入寺(中略)御発句御沙汰・とをく問ふかひある花のさかり哉 千代もなれ見ん松と桜木」執筆蛸川入道、御連歌人数山名赤松以下、

棋政や管領諸大名も召出されている。同六月十一日には義教は四条道場へ渡御し聖人や相阿より発句を所望され、さく花のさかり久しき連哉 夏深き梢も花の都哉 と祝儀の句を詠んでいる。また室町殿月次連歌で頭役勤仕の山名常澤・けふたつは秋も千とせのはしめかな などとある。高貴な者(代作)や堪能者にはつねに発句の用意がある。年中日発句はそのような時の一応の指針となるものであった。『梵灯庵日発句』はそれであろうが、宗砌の「日発句」形態の写本は多数にのぼる。いづれも宗砌の発句を主体としたものである。一方『菟玖波集』では連歌一巻でなく、和歌集なみに個人中心に撰したが、それが家集のように個人の(発)句集として、自撰ないし後人によって編集されるのはほぼ宗砌からである。一条兼良との協力関係(新玉集など)が一つの契機をなしたと考えられる。宗砌の一座した懐紙は多く現存するが、(発)句集も多岐にわたり複雑な重なりを示す。

いま本題の「砌花発句」の重なりを分析するに当って校合した各句集を左に掲げる。()印は前注を享ける。)

『連歌愚句』(大阪天満宮文庫蔵)

発句部以下十一部。奥書に、已上新玉集ニ可被撰入候由申宝徳二年閏白殿へ注申一卷也 とある。欠句、永享十二年三月廿一日北野万句御法案のうち一方右衛門佐持豊座題置にて かすめ月明ほのおしき一夜松。同書を甲本とすると、全く別の乙本が存在する。

『宗砌句』連歌年記不同(静嘉堂文庫蔵)

城北野人宗砌(自注)。正月1・2・3、二月5・4・6、三月9・8・10 (次章の配列番号参照)の順で欠句なし。奥書によると享徳三年五月

廿日信濃國伊那郡知久郷神峰城主、知久民部少輔頼輝の所望に応じたもの(次章『宗砌句A』と表記)。また他の一本の奥書に以上一見候処非愚句連歌少々相交、仍而消之、雖為愚句当初不庶幾事等有之、唯取後見而已、享徳四年四月日、宗砌判とあり、また、砌公加判之本、於或所失了、仍而以伝写本文又写之、是者非愚句、是者不庶幾之由候連歌除之、其後任見出又加之、次に但州之句連々発句等載之畢、宗祇とあつて宗祇が師宗砌の意をうけて編集しているのは注目し得る。

『宗砌発句并付句拔書』(抜) (小松天満宮文庫蔵)

発句二〇句、春部三六句中、枝たる、花ハにしきのとはり哉、こきまぜて桑にまゆある柳かなの二句欠。

『北野会所連歌始以來発句』(北) (太田武夫氏蔵)

文安六年の春発句十二句中四句欠。同比(二月廿七日ごろ)小野俊範但州妙見山にて千句興業し侍るとて所望せし発句、谷風も霞をのほる山路哉、二月十日藤原満実家にて、くれなるの霞や梅の花かさね、枝たる、花ハにしきの戸張かな、同廿七日香川上野入道法楽の三社内祇園発句、春ふかき青葉の花の林かな

『連歌百句』(小松天満宮蔵)

伊勢国司中納言北畠教員の所望による自撰。

『宗砌法師付句』(書陵部蔵)『三吟百韵』春発句一

『救済宗砌百番連誦』(百番連歌) (赤木文庫蔵)

寛正六年乙酉三月日、清田、左救済右宗砌、十七番、発句春九句欠なし。

『宗砌発句』(大東急記念文庫蔵)

天文廿三年霜月九日公維書写、正月欠句二。二月、一四(二月一日は專順の句)。三月、九。計八九句中五五句欠。

『竹林抄』(続類從) 欠句前述「こきまぜて」。『新撰菟玖波集』

『砌花発句』について

(実隆本) 欠句なし。

次に『砌花発句』の配列は先の『宗砌句』、但州五句、播州二句、最後の心の花五句を除けば雑然とした蒐集である(次章の表参照)。素材は、立春、霞、春雪、春風、梅、柳、若草、花待花・月前花・花盛・都花、桜、藤、つつじ、雑春、椿その他。これが心敬の『芝草句内発句』等を経て、宗祇の『自然齋発句』になると、主題の細分化による整然とした配列がなされるのである。

III

1 神もきけ世はことふきの春の風

ことふきとは祝言と書たるなり、ふきと云詞をかりて春のかせと申すなるべし。

〔連歌愚句〕発句部、宝徳二年正月五日北野会所連歌始。〔宗砌句A〕発句正月、宝徳二年正月五日北野会所連歌ははじめ、ことぶ言也、吹といふ詞をかき八祝言也、春の風といふにや。〔抜〕発句春部。〔宗砌発句〕正月五日、享徳六会所連哥始(享徳六は間違ひ)祝言の発句。一条兼良の『心玉集』の資料として『連歌愚句』を注進した中の発句廿一句の一。2 天の御戸あくれハ春とさす日哉

あまのミとくつとも誰かあへれまん。世をみなしれる君にあらてハと聖廟の御託宣の御詞也、御神殿の心とおほほ。此句ハたつ天の戸也。天津空をあまつみ空ともいふことし

〔宗砌句A〕発句正月、天の御戸、聖廟の御託宣の御詞なり。御神殿の御空といふ御空也。此発句の心は只天戸也。天つ空を天つが如し。〔抜〕発句春部。〔宗砌発句〕正月一日。天の御戸はあくるとにかかる枕詞的用法。聖廟は皆原道真を祀った廟で、大平記に「彼の聖廟と申し奉るは慈悲大悲の本地天満天神の垂跡にて渡らせ給へば」(六民部卿

夢想三位局御。cf.〔草根集（丹鶴叢書本）〕の山より高くかすむ春かな事」とある。

3 春きぬといへばなること葉かな

〔竹林抄〕正月五日、北野の会所の百韻に。〔竹間〕正月五日奉行会初也、十八日ハ公方、花ノトシタル也。〔北〕ニナシ。〔宗砌句A〕発句一月、享徳三年同所。〔抜〕発句春部。〔宗砌発句〕正月三日。十八日公方とは宝徳三年正月十八日より、北野社月次会始て將軍義政が発句を詠んだ。二月廿五日のものも含めここでは春の発句ばかりとなる。

4 わか草ハ秋まつ花の木かけかな

〔宗砌句A〕発句二月。細川殿一日千句内。〔宗砌発句〕二月廿八日。この頃二月初旬に勝元朝臣法楽石清水社千句、同廿五日に北野社法楽勝元朝臣千句連歌が催されている。

5 花鳥もときなるかなやさくらかり

此鳥ハ雉子を心にあてたるなり、孔子のことは山梁雌雉時哉ミとあり、め鳥、お鳥の事なり、又ハ後鳥羽院の御屏風に定家卿取合られし花鳥の心にもよれり、此発句あなから非本意、おほき妹なれハかやうにもおもひよれり、ことしけく好ハからす

〔宗砌句A発句二月〕孔子の時なる哉山梁の雌雉と仰有し詞を以也。

〔北野会所連歌始以來発句〕今月ハ桜ト雉トヲ花鳥ト定ラルルナリ故ヤ山梁ノ雌ト云ルル心等也。題詞同（文安六年二月）十四日飯尾肥前入道永祥家の月次連歌に——〔連歌愚句〕文安六年二月肥前入道永祥亭の月次連哥ニ。〔竹林抄〕花の発句に。〔新撰菟玖波集〕花の発句に。論語・郷党、色斯乎矣。翔而集、山梁雌雉、時哉時哉。子路共之。三嘆而作。（色みてここに拳がり翔てしかる後に集まる曰く「山梁の雌雉時なるかな」）子路これを供す三たび嘆きて作。なお宗砌の師正徹にも「すみよしの神のむまれて世を照す時なるかなやま

なべもろ人」と「時なるかなや」を用いた歌がある。（心敬所々返答）藤原定家全集集には、三首詠草（宴遊待曉）花鳥の色にもねにもいそがる、春の遊のしの、め空（拾遺愚草目外之外）と内裏百首、名所春廿首湯等三崎に「花鳥の」の詞をみるのみ。

6 花ハミなきくらかしたの草木かな

是ハ下草の心にあらず、千草万木ハ櫻よりもしたの位をいふなるへし

〔宗砌句A〕発句二月。千草万木ハミナ櫻より下。〔抜〕発句春部。

〔宗砌発句〕二月廿日。〔竹林抄〕〔竹間〕春九十日也。

7 本つ香にはへよもきか宿の梅

〔北〕同（文安六年正月）十三日私宅ニ北野人数を招て張行せし連哥発句に、——源氏ニころはいの大臣の御もとより句兵部卿宮へ梅のちらぬ名をや。〔抜〕発句春部。〔宗砌発句〕正月廿日。〔竹〕会所の奉行承し翌年宿所会に。私宅は永享五年十月十日に新築し

8 朝なきに浪ある藤のうら葉かな

〔連歌愚句〕山名修理大夫入道常勝家ニ而百韻連に。〔宗砌句A〕発句三月〔砌公嫌物〕「永享以來御番帳」に「御相伴衆・山名右衛門正少卿持豊上総介照高」とある。「嘉吉記」には持豊の義弟照高を修理大夫として記す、右の記録と合わない。従つて常勝は修理大夫義理の孫、教清を指すと思われる。嘉吉の乱後、美作守護となり修理大夫法名は淨勝である。

9 瀧ならぬ花ハなおちそをとハやま

〔宗砌句A〕発句三月於清水寺。〔宗砌発句〕三月十七日清水寺にて。

10 春をひけかつらおとこのしらま弓

此しらま弓なり、弓張月なと云類なり。春をひけとハ春を引と、めよの心なるへし

〔宗砌発句A〕発句三月、の詞心は句にも可依事也。〔宗砌発句〕正月十五日。〔竹林抄〕秋をひけ袖も夏

11 わか草のつまやさくらのしたかさね

〔抜〕発句春部。〔百番連調〕同発句。〔連歌愚句〕永享十二年

二月。〔宗砌発句〕二月十九日。

12 櫻さくとを山もりや宮こひと

〔宗砌発句〕二月十四日。〔竹林抄〕智湛の「桜さく山さへ磯のみる

望し侍りしに」の題あり、宗「竹聞」本か山人に花ノ事もしらぬハ都

ノ桜ヲとかくあつかふ心也。

13 瑞籬のひさ木花さく宮井かな

14 藤なれやこの神松の花のなみ

〔宗砌発句〕三月廿六日。花の波。老のなみ。花のなみは歌語。

15 にはへけさ花の名たての春の雲

花の名たては『家持集』『明恒集』（西本願寺蔵三十六人集）『伊勢集』

（島田本）『中務集』等に見られ、また「秋の野の花の名たてにをみなへし」（拾遺集）がある。「梅か枝に物うき程に散る雪を花ともいはし

春のなだてに」（新古今春上・源重之）のような使われ方もする。

16 雨かせも花の春をハさそひけり

「雨かせも」「花の春」はともに歌語。また「寛政波集」発句に救済の

「誘ひても花を思はぬ風かな」があり『撃家抄』、『初心求詠集』にも載せる。

17 花ハ梅時は春よりひらけなり

〔宗砌発句集〕宝徳正五。〔抜〕発句春部。〔宗砌発句〕正月二日。

『砌花発句』について

「源氏・藤のうら葉」に、「春の花いづれとなく、みな開け出づる色ごと

18 はなく、に色香ハみちぬ宿の春

「花々に」は「後撰集」にあり、花の色香については「古今集」に「よ

そにのみあはれとぞ見る梅の花飽かぬ色香は折りてなりけり」（業性）

が著名。「源氏・若菜下」に「花の色香ももてはやされけり、げに心にく

きほどなり」とある。宿の梅は宗砌の自邸かどうかかわらないが、宗

砌は永享五年十月十日草庵を営み、山名持豊・正徹等を招いている。（草根集巻三）

19 名もしるし此神の木の花の兄

〔抜〕発句春部。〔宗砌発句〕正月廿六日。梵灯庵主「袖下集」に、

「花兄と申は梅の異名也。初春の発句にすべし。たとへば梅を花の兄と申事、万の草木の先に

花開が故に花の兄と申なり」

20 八千代へむ木陰花なる椿かな

百首の歌よませ侍りける時祝の歌、後法性寺入道前関白太政大臣「八

千代へむ君がためとや玉楯はがへをすべき程は定めじ」

21 あつま屋の梅よりこちはハ句けり

〔宗砌発句〕正月十二日。「大鏡」時平伝「こち吹かば句おこせよ梅

22 宿の梅はなもひさしの続木哉

23 春風に行人したふやなき哉

「新撰菟玖波集」あつまへくたりける人のむまの「竹林抄」あつまへ

人の馬のはなむけはなむけし侍し時の連歌に柳を「下りける

し侍しときの会に「竹林抄・聞書」まとひくるは、人したふ様也。はなむけの会の発句なれば如此、賤（宗砌発句）二月二日。春風の

はなむけの会の発句なれば如此、賤（宗砌発句）二月二日。春風の

はなむけの会の発句なれば如此、賤（宗砌発句）二月二日。春風の

はなむけの会の発句なれば如此、賤（宗砌発句）二月二日。春風の

下向の日専順等と百韻張行。〔鎌倉大草紙〕に「永寿王(十三歳)宝徳元年正月(中略)亡父持氏の跡をたまはり公方御対面あり、御太刀御馬を被下、同日十九日閑東へ下らる。此若君の和歌の師にてありし正徹書記饒別の歌を送る。あやうきを天かへてやまもり劍雲井のつるか岡への神。この正徹の歌も連歌で云えば秀句的である。〔康富記〕同日条に「一条殿……今日御連歌也、山名兵部少輔已下武家輩可参候之由有其説」とある。〔兵部少輔は教之。また教清(応仁武鑑)〕

24日をふれば花もさきつく長雨哉

25たちなきそ花こそにしき春霞

〔抜〕発句春部。〔宗砌発句〕三月五日。

26さかり〇をハひくや柳のかみつ枝

〔抜〕発句春部。〔宗砌発句〕二月六日さかり葉

27月雪もむしろしかむや花の陰

〔宗砌発句〕三月十五日。心敬「所々返答」に「いりはかゝの体、未来記歌」とある。

28ともす火のした草もゆるつゝし哉

〔抜〕発句春部。〔宗砌発句〕三月六日ともし火の。内閣文庫蔵

〔砌公嫌物〕中にあり。

29をそ櫻名をえてさける一木哉

〔抜〕発句春部。遅櫻。〔宗砌発句〕三月廿三日。「おそ桜」は金葉以下の歌語。

30くみあけよ花ちる谷の春の水

〔宗砌発句〕三月廿一日。内閣文庫蔵「砌公嫌物」。「花ちる谷」は新造語か。

31さく藤のうら葉はなみの玉藻かな

享徳二年三月十五日何路(天満宮文庫)。〔宗砌発句〕三月廿八日。

32花はとひ鳥ハ目わたるやよひ哉

〔宗砌発句〕三月廿五日。

33浪や藤沢へに庭の野すち哉

是ハ七条道場ハ藤澤より時衆上落ありしとき

〔満濟准后日記〕「看聞御記」「陰涼軒日録」「後鑑」等に七条・六条・四条各道場の記録が散見されるが、右の記は不詳。七条道場記録、同文書等も同様。応永三十一年、四条を七条の末寺と定めたことがあるが、義教の代には四条道場で連歌興行(満濟)六条道場参詣・七条道場へ引物を贈る(陰涼)等將軍と密接な関係にあった。四条道場は現新京極入口あたりで、佐々木道誉の寄進。六条道場は東六条玉水町、枯殿邸辺。七条道場は東洞院にあった。

〔宗砌発句〕三月廿四日。秋の野道場にて、波や、秋野道場は文正元と「後鑑」にあり、それによるとこの道場は勘解由小路、富小路附近(現在の京都御所東南部)にあったと思われる。

34ちららてけふ弥生をしたふ花もかな

〔抜〕発句春部。〔宗砌発句〕三月卅日。花もなし。〔竹林抄〕三月尽に。「竹聞」花をちらせずして花がノコ

リテしたふともかなと也

35花ハひもやなきハカミを時つかせ

文安五年二月五日山何(天満宮文庫)。「抜」発句春部。〔宗砌発句〕二月廿三日。「宗砌田舎への状」に、「花はひも柳や髪をと申候はば、まけ候。いづれをも同様にて候。如此之時、伴の切所を存知たる随分にて候」と目注している。

36花おそしまた木からしか春の風

〔抜〕発句春部。「花おそげなる」(新古今・西行。新撰筑波集、前関白)

37見わたせばはこころ雪まの野山かな

「見わたせば」は広く用いられる歌語。野山の雪解けの眺望は長高の句。

38 いつとは松やはわかん千代の春

cf. いつとは時はわかねど秋の夜ぞ物思こと限なりける (古今集秋上・よみ人しらす)。いつとは影は分かねど夜半の月霞めは春の物にぞ有ける (続後拾遺春下 後嵯峨院)

39 花を踐真砂は庭の木かけ哉

「往生礼讃」一巻 (大正新修大藤経第四十七卷諸宗部四) に「六時間鳥合四寸踐華低相看無不正豈復有長迷願共諸衆生往生安楽国とある。

「無量寿経」(岩波文庫本浄土三部経 8・38) 「尽夜六時に鳥の声の調和するのを聞き華の敷かれた地上を歩くと四寸ほどさがる。看るところのありさま(相)は一つとして正しくないことはない。どうしてまた長い迷いがあるうか」

40 むらさきにさすやはひえの藤の夜

〔抜〕発句春部。〔竹林抄聞書〕藤をははひえと云、あくをさし染るたる藤也。紫には入染たる藤の花池にはひさす物にそ有ける。〔竹林抄の注〕行動(竹注370)はひえとは藤のはふたる枝也。さすやはひえといへるは紫はひをさしてそむる也。紫に八しは染たる藤の花池にはいさす物にそ有ける。

〔竹聞〕はひたる枝也紫ソムル時

41 花を此たれかハまちしけさの雪

〔宗砌発句〕二月十七日。

42 梅かゝにうれしきつゝむ真袖かな

〔百番連調発句〕〔宗砌発句〕正月廿七日 香の袂かな

43 むめさくら花より花にうつるかな

〔宗砌発句〕二月十三日 はなに。

44 路の名のあやをるはなの宮こ哉

綾小路と関係するか。〔綾小路有俊(左兵衛督)は民部卿(応永34)永

〔砌花発句〕について

享2)藤行有の子、宗砌は高山民部入道(古今連談集)高山民部少輔源時重(種玉庵宗祇伝)。〔百番連調〕道の都かな

45 花にそへおほる月夜のけさの空

〔百番連調〕けさの雲。〔宗砌発句〕三月十八日 臘月、雲。〔竹林抄〕題しらす。〔竹聞〕雪ナラハ月にそハ、くもら 〔新撰菟玖波集〕花の発句に、雲。

46 此庭やうへか植木の花の陰

〔抜〕樹のかけ。〔宗砌発句〕二月廿五日二条殿にてうへき。〔百番連調〕植木、かけ。二条殿、関白太政大臣従一位持通。あるいはその父持基(文安2没良基の孫、兼良の従兄弟)。作庭を褒める挨拶。

47 すみれつむ木かけを花のかたみ哉

〔宗砌発句〕三月廿二日 木陰、形見。〔竹林抄〕題しらす。

48 うれしきをつゝむたもとか春霞

49 春かせに梅かかくたる山路かな

50 水たまり梅ちる庭の長雨哉

〔抜〕発句春部。〔宗砌発句〕二月十五日 水たまる梅さく庭の詠かな。〔竹林抄〕題しらす。

51 藤ハさき昔ハむ杉の古枝かな

52 ねきことはたるひもとくる宮のかな

〔宗砌発句〕正月九日 宮井

53 袖かけて花やおらむ春かすみ

cf. 袖かけて引きそやらぬ小松原何れともなき千代のけしきに(後拾遺集)

54 掲焉さきひかりを御代の春日かな

cf. いちじろき印なりけり新玉の年のくるゝは雪にざりける(貫之集)

いちじるき山口ならばこゝ乍袖の気色を見せよとぞ思ふ(蜻蛉日記)

55 天地はふるときゆとのみゆき哉

56 見よや人やふこそ梅ははしめなれ

但馬国養父(郡)を意識してのものか。日の光やぶしわかねば磯神ふりにし里に花も咲きけり(古今・雑上・布留今道)。享徳三年正月何人百韻・氏栄「梅はこの花の手の向の初めかな」cf.自然齋発句「やぶしわかぬ春日にゝほへ宿の梅」

57 七重ひくかすミハあまのみしめ哉

御注連。嘉吉元年播磨国八社法案空号連歌「長くひけ秋ゆく月の御注連細」(宗砌) いづれも長高体か。

58 木にもさけ岩こそ浪の春の花

此前五句ハ但州九日にて五社法案之時也

59 折ちらすぬきにもとらぬさくら哉

巴上播州御発句之、但州進美寺へ御途首時

60 松かえハ花にたえたる高根哉

進美寺は但馬国養父宿南村にある名刹。(13)

61 とるつかのみしかき筆やつくくし

62 さかりかないはふこと葉の花さくら

63 紅葉かと思ひつゝしやあきの花

心敬「所々返答」に「思ひつゝじ不庶機哉」

64 雪消て露をいたゞく若葉哉

65 つむ人に神や呢月の手向草

〔宗砌発句〕正月十八日普光院御時北野にて。む月の。

院は普光院義教。

66 をしの毛の色なる波や藤の花

睦ぶの秀光

67 さきにけり人のこと葉の花櫻

〔草根集三〕文安四年正月二日、小笠原備前入道浄元申おくれし春立といふばかりなるためしより君かことはの花そまたる

、たくひなく春立けふにまちそみる侍らんかたの言のはの花

68 おさまれる代は春なれや天津かせ

享徳二年二月日何船(独吟)天満宮文庫。〔宗砌発句〕正月廿三日。

69 梅ハわか花にかくるゝ老木哉

〔抜〕発句春部。〔宗砌発句〕二月三日。〔竹林抄〕題しらず。

〔竹間〕鶯ノ花ニぬれてふ梅花折てかさゝん老かくるやト。本歌ノヤウニ人ノ老ヲハかかてワカ老ヲかくすと也

70 神風や井せきハ花のよる瀬哉

〔北〕或人太神宮にて千句興行せんとて、

人興行千。〔宗砌発句〕三月十九日 文安六年伊勢路にて。北畠教具

句の内。〔宗砌発句〕三月十九日 文安六年伊勢路にて。北畠教具

勢国司木造教親か)は文安四年八月上洛しており、「何路」等一座で交歓

している。また「古今連談集」や「伊勢国司文」を贈っている。「宗砌

句」(松井本)自註に「これは伊勢国に侍る人正月より十二月迄京のやこ

となきかたさまへ、一月つゝ御発句を申下て太神宮法案を申せしうち、

六月は宗砌所望ありしほとに晦日(ころ仕)かはし候也」などである。

(金子氏「新撰寛政波集の研究」)

71 君や花御代の春こそ盛なれ

〔北〕同(文安六年二月) 廿五日管領右京兆にて

〔連歌愚句〕発句部同廿五日細川右京大夫

〔抜〕発句春部。〔宗砌

発句〕二月廿二日。〔砌公嫌物)。

嘉吉二年八月四日管領細川右京大夫入道常喜(持之)今日逝去、四十三

歳也。(中略)子息(勝元)十三歳也(康富記)。

72 春雨は色こき花のしくれかな

〔北〕同廿三日佐々木大膳大夫亭にて。〔連歌愚句〕発句部同二

月廿三日佐々木大膳大夫持清亭の一日百韻連歌に。〔抜〕発句春部。〔宗砌発句〕三月十日。

佐々木大膳大夫持清は道普より五代目、管近江半国、飛彈一円、出雲、隠岐。宝徳元年侍所別当。『康富記』によれば、当日は京は晴となっている。

73 藤浪をこく舟岡の山路かな

〔北〕三月廿六日梶井殿両坊にて。〔抜〕発句春部。〔百番連調〕

〔宗砌発句〕三月廿七日。梶井殿宛胤法親王、梶井宮は東坂本梶井舟岡聖蹟に移り後更に白川に、又応仁乱後愛宕郡大原村に移転した。天台宗三門跡寺院の一つ。將軍義教の弟義堯も梶井僧正であった。

74 待えたるたかはつ花そやま櫻

〔連歌愚句〕発句部、文安三年二月或所ニ而。〔抜〕〔宗砌発句〕

二月廿七日。〔竹林抄〕花の発句に。『竹聞』山さくら山ニアル櫻ヨリ見て、こなたノ悦喜したるハをかし、あなたにてたれか待えたるらんと也。

75 なつけ春さくとねりこのはなれ駒

76 神代より花は八雲のたつ木哉

77 藤浪のうき海松なれや岩ね松

〔宗砌発句〕三月十六日。

78 ことの葉の種や神代の春の花

79 春さえて雪気にかすむ今年哉

年次未詳百韻何木（天満宮文庫）。〔連誦百句〕春部独吟発句。

〔宗砌法師付句〕同。〔宗砌発句〕正月十三日。

80 あふくへき代なり国なり神の春

81 朝もよひきのへ子日の小松かな

82 若菜つむたもとか雪の下もえき

若菜つむ袖とぞ見ゆる春日野の飛ぶ火の野への雪の村消（新古今集・

『砌花発句』について

春上・教長。卯花の垣根の草の下もえき（発致波美・教済）
83 うちいたす石の火なれや岩つゝし

〔抜〕発句春部。〔宗砌発句〕三月廿九日 打出る。cf.〔草根集十二〕いそくなよ手折つゝしの燈によるの山路はかへり出なん

84 雪しろし霞やひもをときは山

〔抜〕発句春部。

85 あまつ神世におほふ袖か春霞

86 風わたり梅とひにはふ千里哉

〔北〕九州鳴津陸奥守忠国田舎にて安楽寺法楽の一万句興行せむとて、京都へ発句を数廿申す。公家へ関白殿御父子以下、武家ハ公方様管領以下人々、御門跡ハ御室以下被之、此内宗砌か分二。

〔連歌愚句〕同（文安六年二月）比鳴津陸奥守忠国於九州興行の安楽寺法楽の一万句のうち。〔百番連調〕〔宗砌発句〕正月廿

四日。嶋津忠国は久豊男修理大夫陸奥守従五位下、日隈陸奥守永享十年琉球を討ち中山王を降す。文明二年正月二十日卒六十八。梅か

〔草根集三〕香に春は千里そこもり行いくらの花にあらしふくらむ菅公道愛の梅の木が太宰府へ飛来、生え匂った故事。安楽寺の梅。cf.『飛梅千句』。

87 春ハこれ千代てふ年のはしめ哉

〔北〕同文安六年正月五日北野会始ニ。〔抜〕発句春部巻頭。

〔宗砌発句〕正月四日。

88 かすむなり千世をしめ野々小松原

〔宗砌発句〕正月十日。

89 かすめ月明はのおしき一夜松

〔連歌愚句〕永享十二年三月廿一日北野万句御法楽のうち一方右

衛門佐持豊座、題霞にて。

〔宗砌発句〕正月十六日、永享十二北野にて霞を題にて。

90 待わふと花にきこえよ春の風

91 蒔とむ雨こそ春の花の種

〔宗砌発句〕二月九日。

92 花のとき人も春なる宮こかな

93 夕日影そはれる花のひかり哉

心あてにそれかとぞ見る白露のひかりそへたる夕顔の花（源氏物語・夕顔）cf. 雲にうつる日影の色もろすくなりぬ花の光の夕ばえの空（玉葉集・春下、為頭）

94 花ひとつよろつにかなふ手向哉

95 梅も世の色香にふける嵐かな

〔宗砌発句〕正月十一日。cf. 〔草根集〕「露ぞちる花の色香を」

96 月に花心つくし木のまぢ

〔抜〕発句春部、花に月。〔竹林抄〕花に月、題しらす。〔新撰菟玖波集〕花の発句に。cf. あたら夜の月と花とを同じくは心しれらむ人に見せばや（後撰春下・源信明）↓源氏物語・明石。たづねきて花に

くらせる木のまより待つとしもなき山のはの月（新古今集春上・雅経）

97 雨に人なおやたのまむ花の陰

櫻がり雨は降きぬ同じくばぬるとも花のかけに隠れむ（拾遺集春、読人しらす。定家「御幸になるゝ花の陰」のような述懐の意がある。）

98 かつらに花なき花の一本哉

cf. 「木咲く花にはちらぬ心かな」（菟玖波集・尊氏）

99 たかららすぬきにもまさる櫻かな

100 春風にちらぬハ花のあを葉哉

101 山のはの月のかすみやミねの松

102 花の春くれなハなけやほととぎす

103 時は春所ははなの宮こかな

104 山松はこゝろの花のすゑ葉哉

〔抜〕発句春部。

105 櫻かり花やくゝろのとまりやま

〔抜〕発句春部。〔宗砌発句〕二月廿一日。花にこゝろやとまり山。cf. 又や見む交野のみよ、櫻がり花の雪散る春の曙（新古今集春下・俊成）

106 たのめ人神の心の花のかけ

〔抜〕発句春部。〔宗砌発句〕三月十三日、神や

107 日そおしき花はゆふへの色もなし

〔抜〕発句春部。〔宗砌発句〕三月八日、花にて暮る色もなし。

〔竹林抄〕春の発句のうち。〔新撰菟玖波集〕花の発句に。

108 花こゝろありて時しる手向かな

cf. 頼めどもいでや桜の花心さそふ風あらば散りもこそすれ（続後撰春下、基俊）

次頁上段の表は以上を番号順にまとめたものである。

IV

〔秀句とみられる句〕1の「神もきけ」は歌語。「ことぶきの」

吹く春の風と秀句仕立にした。11の「わか草の」は枕詞で「つま

にかかる。同時に襲の色目（表は薄青、裏は濃い青）でもある。

「さくら」も桜襲を意味し、下襲として着用する早春の粧いを云

うのである。22の「宿の梅」は万葉・古今以来の歌語、ひさしの

9	8・70・89・71・72・86・11・74・1	連歌愚句甲
1		17 連歌愚句乙
9	10・8・9・6・4・5・3・2・1	宗 砌 句
33	35・74・36・50・58・11・69・84・7・3・19・2・17・1・87 73・40・29・107・25・96・106・46・104・72・105・26・71・5・6 34・28・83	宗砌発句并 付句抜書
1		79 連歌百句
8	73・70・86・71・72・5・7・87	北
1		79 宗砌法師付句
7	11・73・44・46・86・45・42	百番連哥
55	68・7・65・89・10・79・21・95・88・52・1・87・3・17・2 71・105・6・11・41・50・12・43・91・26・69・23・42・19・86 70・45・9・77・27・106・72・107・28・25・5・4・74・46・35 34・83・31・73・14・32・33・29・47・30	宗 砌 発 句
13	34・40・45・96・12・107・5・74・23・50・69・7・3	竹 林 抄
5	5・107・96・45・23	新撰菟玖波集
45	54・53・51・49・48・39・38・37・24・22・20・18・16・15・13 80・78・76・75・67・66・64・63・62・61・60・59・57・56・55 108・103・102・101・100・99・98・97・94・93・92・90・85・82・81	重ならない もの
計	上記の番号は各集の収載順に表示した。(右から左へ)	

続木は秀句。24「日をふれば」は経る降るの掛詞、長雨の縁。25「たちなきそ」は立ち(裁)な来(着)そ。と假にむかつて命じ、花満開の風景を演出する。33「浪や藤」は沢への藤浪に沿って枯山水の野筋を作り石を立てた庭が連想され、同時に藤沢から上落した時衆への挨拶となつている。典型的な秀句仕立ては、35「花はひも」の句で、時と解きをきかせて、花は紐解き柳は髪を解かせる春風というわけである。『源氏』藤裏葉の巻に「幾かへり露けき春をすぐし来て花の紐解く折に逢ふらむ」など、紐を解く艶美な表現をした。柳の髪も枝の細くしなやかに垂れる様を見立てて、女の長く美しい髪を連想させる(和漢朗詠集)。52「ねまごとは」は垂氷が春風で解け同時に願い事も解決すると社を讃えた神祇の句。63「紅葉かと」は思ひつつを躑躅に転換している。襲の色目も、紅葉と躑躅は蘇芳色でよく似ていて紛らわしい。70句は「神風や井せき」は伊勢の秀句。文安六年三月伊勢へ下向している。76「神代より」は八雲つつ出雲の神話(上代歌謡)による構想。白雲に粉う花の立木と云い掛けた。77「藤浪の」は浪の縁から海草の海松と藤の花に囲まれた庭の岩ね松が共に濃緑色であるところからの幻想的な見立て。84句「雪しろし」の「ひも」は紐と水面「とき」は解きの掛詞、「物を兼たる」(悦目抄)は普通の秀句で、古今集では好まれた技法である。

〔本歌取りの句〕7の「本つ香に」の句は『源氏』紅梅巻の「も」とつ香に匂へる君が袖ふれば花もえならぬ名をや散らさむ」による。『兼輔集』の「もとの香のあるだにあるを梅の花いと匂の

遙かなるかな」が背景となっている。12「櫻さく」は新古今、後鳥羽院の「櫻さくとを山鳥の」の詞を取り、遠山の山守とした。20「八千代へむ」は「八千代へむ君がためとや玉椿はがへをすべき程は定めず」(新勅撰集賀歌・兼実。枕草子に葉がへせぬときは木をあげる。椿は常緑の喬木)。21の「あつま屋」の本歌は管公の「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花」の歌であろう。(東屋に東風は秀句的) 31の「さく藤の」は各句に本歌を取る本歌連歌で、「行春のかたみに咲る藤の花うら葉の色は浪の玉藻か」がそれである(15)と云う。40「むらさきに」は「紫にやしほ染たる藤の花池にはひさす物にぞ有ける」(後拾遺集春下、題しらず、斎宮女御)と同内容の句である。49「春風に」は家隆の「吹きおくる臘月夜の春風に梅が香のみぞかすまざりける」(壬二集中)の詞二語を取って当座の景とした。51「藤ハさき」は現存六帖「かぐ山のむすぎが本にむす苔の色も変はらで世をやつくさむ」(藤原隆祐に寄る。53「袖かけて」の本歌は「くれなるに匂へる妹が袖かけてをりまがへたる梅の初花」(新統古今集春上・行家)であろう。「源氏」寄生にも「すべらぎの挿頭に折ると藤の花及ばぬ枝に袖かけてけり」という女三宮を妻にした薫の歌もある。58「木にもさき」は「水上に桜ちるらしよし野川いはこす波のはなとみえつ」(統後撰集春下・郁芳門院安芸)。「吉野河瀧のうへなる山桜岩こす波の花と散るらし」(統拾遺集春歌下・行家)などと同趣向。波のさけ散るの秀句。61「とるつかの」は「源氏」濡標巻に「つか短き筆など」とある。季語つくづくしに似ているので実景とした。68「おさまれる」は「治ま

れる御代の春とや鶯の鳴く音も今朝はのどかる覽」(玉葉集春上・鷹司冬平)の前半の詞を取る。69の「梅はわか」の本歌は「古今六帖」六梅に東三条右大臣源常の作とする。75「なつけ春」は「とねりこのしたにはゆる駒ひゆを引きすてたらばぬしやのるべき」(散木奇歌集雑上)に寄った。「とねりこの花・放れ」は秀句。花は淡緑色で春に開花する。木は落葉の高木。俊頼歌は馬寛を駒と見立てる。宗砌の句には舎人子の意味もある。「常はせぬ」(吾妻)作意が認められる。79の「春さえて」は「空はなほかすみもやらず風さえて雪気にくもる春の夜の月」(新古今集春上・良経)に寄った。兼良源氏談義は文安六年二月卅日(康富記)。

「万葉的な詞の句」8の句「朝なきに波」は万葉に多出する。

「藤のうら葉」は「春日さす藤のうら葉のうらとけて君し思はばわれも頼まん」(後撰集春下・詠人しらず)があり、一座互に頼み合う心をこめたか。13「瑞籬の」は万葉の「瑞籬の久しき時ゆ」のような枕詞。秀句「楸咲く」も万葉にある。神祇の句。42「真袖」(麻菰塗)は万葉語。両袖。「落窪」に「うれしきつゝまば袖ぞ」とあり、慈円が公経の任大臣を祝した贈答歌に「嬉しさを包み習ひし袖に」又「袖になほ二たび包むうれしさも」(統千載・雑歌中)がある。「梅か香」は「新古今」家隆歌に見る艶艶な歌語。当座の挨拶とする。なお48句も同巧。永享六年四月宗砌が白衣になった(選俗)時、正徹の申しをくった歌への返し「かへてだにかゝること葉の花のかをけふはたもとにつゝむうれしさ」(13)も同歌語。47句「すみれつむ」は赤人の「春の野に董

つみにと」が連想される。「花のかたみに」によって、時の推移のあわれさを感じさせ、能因歌「荒れたる宿に葦摘みけり」(新古今集・雑中)、に似た幽かな感傷が認められる。50の「水たまり」は万葉(上代歌)では、池の枕詞として使われている。ここでは長雨の縁として云い、庭の詠(眺)めは当座の景であろう。54「いちしろく」は万葉に十数首みられる。55「天地は」も万葉語で、「のみゆき」は秀句。87「朝もよひ」(朝もよい)は入磨歌に「朝もよし城上の宮を」のように「き」にかかる。小松を引くのは正月初の「きのへ子日」である。従って、この句は嘉吉四年(甲子年)の正月十四日(甲子日)の作である。「新しい詞の句」30の「花ちる谷の春の水」、37「こゝろ雪まの」、60「花にたえたる」、66「をしの毛の色なる波」、72「色こき花」等。

宗砌は『花能万賀喜』で「秀句を好み秀句を嫌ふ」と秀句を肯定している。本来連歌は問答であつて、伝統的な本意を下敷としながら当意即妙の機知を働かすところに一座興行の本質があつた。従つて当時盛んであつた答(当)弁(猿楽)とも関連するであろう。また室町「花の御所」を始め作庭への関心の高まりとも無関係ではない。山水草木、奇花珍石、長松鸞鷲等々が発想の場を提供したに違いない。心敬の反論(『所々返答』)を越えて宗砌の句には広さと豊かさ一味を連帯させる巧者の思ふきが感じられる。古典に対する深い洞察と共に「花のひもときもいまはとまたれけり」(義政)と云つた將軍や武士との同質性を見出すのである。

『砌花発句』について

V

將軍義教の政治姿勢は武威による厳しい紀綱の改革にあり、堂上・地下を問わず年中行事が規制力をともなつて、習俗となつた。無類の連歌好きであつた義教は、永享五年二月「北野社法楽一日万句」を催した。山名時熙が「おほせ事をうけたまはりてふれもよほし」(兼良)とある。宗砌は親当(智蘊)らと共に赤松播磨守滿政(山名氏)一座に加わつてゐる。還俗後は再度山名氏に仕え、同六月「何木百韻独吟」を北野社に奉納して、連歌界を領導すべく祈願した。嘉吉の乱後、山名持豊は「今ノ世ニ肩を雙ブル人ナキ」権勢を誇る。持豊の後援で管領となつた細川勝元は持豊の上洛を俟ち文安二年評定始めをする。同四年勝元の執奏により兼良は関白に再任されるが、翌年六月宗砌は北野社連歌会所奉行となり、幕府の連歌宗匠職に任命された。同六年三月四日、左府鷹司房平の花見連歌に兼良、教房父子は旧友宗砌を伴つてゐる。兼良は良基の外孫に当り、式目の改定(新式今案)も救済・良基の關係に準じ宗砌と共にした。しかし、山名氏の権勢を抑えようとする一連の動きの中で、享徳三年十一月二日山名「御退治(康富記)」となり、勝元の策により結局、翌日「於金吾禅門者令達上意之間可隠居在国」(同)となつた。宗砌もこれに従ひ但馬出石へ隠退したのである。²¹⁾『砌塵抄』に「其比高山の宗砌と云人有て、世にこそぞり此道を学ぶ。(略中)、定家、家隆の旧言を移すのみならず、連歌の道に於ては救済周阿が趣好にも越たりとなん申あへ

り」と門弟の太田垣忠説は述べる。数多い宗砌の発句が回顧される所以である。

当時花見には西芳寺・若王寺・大原野・常住光寺・東山花頂山寺が賑った。將軍義政は毎年観桜を楽しみその華麗さは「一代の奇事」(藤涼軒日録寛正六)と言われた。將軍発句に、さきみちて花より外の色もなし とうのがある。「砌花発句」はこの時代に成立したのであろう。

〔注〕

- (1) 表紙は浅黄色綴子で亀甲紋に鳳凰を配した図柄。見返しは六弁の大葉に葡萄状の花七つを描く蔓草模様。端作に内題を書く。十六・六種×二六八種の継ぎ斐紙。後に発句と題した五十句(宗祇)を并載する。室町中期の筆写か。
- (2) 島津忠夫氏「連歌史の研究」宗砌の作風。
- (3) 「撃蒙抄」にも発句は百句の王で一座を左右するとある。
- (4) 本文は古典大系による。「僻連抄」に「一かどの所詮ある体」と云う。なお島津氏「連歌の研究」付句と発句に解説がある。
- (5) 統群書類従補遺一・二による。
- (6) 浜千代清氏「連歌―研究と資料」連歌の発句。
- (7) 注(6)に同じ。
- (8) 金子金治郎・太田武夫氏編「七賢時代連歌句集」。なお湯之上早苗氏「発句帳」の解説に「砌花発句」中の注は自注かと云う。
- (9) 拙稿「宗砌―人と作品―」(昭和47・2「研究紀要(成蹊)」に翻刻。
- (10) 前掲(注8)および「連歌貴重文献集成」三。

(11) 横山重氏編「心敬作品集」。および岩波文庫本。

(12) 注(11)に同じ。

(13)・(15) 金子氏「新撰菟玖波集の研究」第三章。なお山名・赤松の抗争は播磨領をめぐってであり、宗全は但馬隠退間際にも播磨(出兵して)赤松則尚を討った。

(14) 寺本直彦氏「源氏物語受容史論考」では宗砌に注目。ただ「砌花発句」は見当らない。

(15) 注(13)の金子氏の著書。

(16) 林屋辰三郎氏「中世芸能史の研究」第三章。

(17) 奥田勲氏「宗砌の存在」(早稲田大学蔵資料影印叢書月報24)も同意見。

(18) 稲田利徳氏「室町前期の歌人と連歌師」(「国語と国文学」昭52・6)に香川県仁尾町常徳寺の新資料が紹介されている。

(19) 「康富記」文安四年六月十五日条。

(20) 「康富記」文安六年三月四日条。「旧友」は「筆のすさび」。

(21) 拙稿「宗砌年譜」(昭和57・10「園田国文」第四号)。

底本は書院部(63748・1・509・26)で二十数年前に撮った(高橋写真)現寸大十枚綴りのものに拠った。

なお紙数の都合により一部省略ないし縮約したところがある。

(おくだ・ひさてる 園田学園女子短期大学教授)